

猫と犬と馬と狐

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

あらかじめ、動物に関係する館蔵品を紹介する稿ではないことをお断りしておく。平安期の貴族の日記を卒論に選んだ身として、今年の大河ドラマは興味が尽きない。以下のエピソードが今後放映されるかどうかかわからないが、身分制と非条理が動物と絡んだ、物悲しい逸話を取り上げたい。

それは、『枕草子』でも有名な一節、猫と犬のいさかい事の顛末である。一条天皇は一匹の猫を、文字通り「猫可愛がり」しており、世話係として馬の命婦^{みょうぶ}を特別に付けていた。表題の「猫と犬と馬」までがここで登場した。ややこしいが、“馬の命婦”はれっきとした人間で、宮中の女官である。外見や身体的特徴を指摘するのは憚られるが、想像するに顔の長い女性だったのかもしれない。

律令制の下では身分制は位階が基本になっており、朝廷に勤める官人は男性でも女性でも必ず位階をもっていた。公卿（三位以上と四位以下の殿上人）が内裏清涼殿の殿上の間に上がることが許される。彼らが貴族である。殿上人は天皇の勅許によってのみ特権的な待遇を得ることができたため、その天皇が退位すると効力を失う。注目ポイントは五位という位階で、五位になるかならないかで待遇やその他の面で格段の差があった。官人の大半はその五位に到達しない。「国立大学の教授は亡くなった後で勲二等をもらえるけれど、当時の諸大夫（四位、五位の官人）にすぎないから昇殿は人によるなあ。まあ死んでるから関係ないがね」と、私の大学の恩師が苦笑いして語っていたことを思い出す。恐れ多くも、天皇の膝の上に上がるには五位の位階が必須で、猫は“命婦の御許”という名を得た。“命婦”とは従五位下以上の位階を有する女性で、“御許”とは高貴な女性に対する敬称であり、男性には“大臣”や“御殿”と表記する。すなわち、天皇の愛猫はメス猫だった。猫と、その世話係の“馬の命婦”と、存命で活躍中の高名な国立大学教授の三者を考え、身分制の暗部と馬鹿馬鹿しさを痛感したのは若き学部生のころだった。

一方、犬は“翁丸”という名前前で登場する。“丸”は船、人、刀、犬や馬の名前の接尾辞で、元々は上代から男子の人名に用いられていた“麻呂”に由来し、特に身分を表するものではない。“翁”といい、“丸”といい、名前から察するにオスだったのだろう。こちらは一条天皇が寵愛した皇后定子のサロンで可愛がられていて、定子の食事時には余りものをもらえるかと待機していたという。また桃の節句の折には、蔵人頭の藤原行成が翁丸の頭を桃の花で飾り立てたり、



犬の御殿玩具 金沢 右：高10.8cm
加賀百万石の城下町、金沢の御殿玩具。房の付いた緋縮緬の首綱を巻いた狛を模した張子の犬。江戸時代には室内で飼う狛が大名や商人の間で流行した。これらには首綱を付ける。(天理参考館蔵品)

特別に桜の腰飾りを作ってやったりして、当人（犬）も得意げに歩き回っていた、『枕草子』にある。ここでも述べられている通り、猫は首綱をつないで室内で大切に飼育される一方で、犬は屋外で放し飼いにされていた。『源氏物語』の若菜巻で、女三宮が飼う猫の首綱が簾に引っ掛かって巻き上げられる描写のよ

うな事態がたびたび生じていたのかもしれない。猫は個人的な、飼い主と対一の関係だったが、犬は放し飼ということもあるのか共同で世話をする。江戸時代でも地域共同で面倒を見る地域の番犬となっていた。それが生類憐れみの令で大変なことになるのだが、それはまた別の話で、ともかく翁丸には特に世話係もなく、清少納言たち定子のサロン全体で可愛がっていた。その、天皇の愛猫と翁丸、馬の命婦の穏やかな日々が事件が起こった。

あるとき馬の命婦が、縁側で日向ぼっこをする猫に室内に入るように促してもいうことをきかないので、脅すよう翁丸に命令した。命令に忠実な翁丸が飛びかかったところ、驚いた猫が天皇の簾中に飛び込み、一部始終を見ていた天皇は激怒して、「この翁丸を打ちてうじて、犬島へつかはせ、ただいま」と命じた。馬の命婦は恐懼し、身も世もない有様になっている。犬島は犬の流刑地である。鳥飼（現：大阪府摂津市）近辺の淀川の中州にあったらしい。鳥飼は鳥を育てるというよりも、鳥養牧^{とりかいのまき}という畿内に設置された近都牧^{きんとまき}の一つで、諸国から貢進された牛馬を育成する御牧だった。上流に上牧（現：高槻市）という地名が現在も残っている。このあたりには馬島という中州もあったというから、犬島も当初は流刑地ではなく、狩猟や番犬としての使役犬を訓練する場所だったのかもしれない。ともかく、お怒りになった一条天皇は翁丸を犬島送りとされた。その後、定子のサロンでは翁丸がいなくなったので寂しく思っていたところ、一匹の犬が全身腫れ上がった哀れな姿でよろよろと現れる。サロンの女房たちは、もしやと「翁丸か」と問いかけても反応せず、食べ物を与えても近づいてこない。ところがその犬は、清少納言が「可哀なことをした」という言葉に反応して、身を震わせて涙をこぼすではないか。清少納言は“翁丸”と確信して名前を呼びかけると案の定切なく鳴いたので、人間を恐れて犬違いのふりをしていたことが判明する。犬島送りの途中で逃げ帰ったところ、ひどく打ち据えられて再び放逐された翁丸は、定子のサロンに逃げこむ。しかし身元が明らかになることを恐れて別人（犬）のふりをしていたのである。犬にも心があることよと天皇も御心を動かされて翁丸は赦された、という運びになっている。

愛犬家ならぬ人びともお怒りかもしれない。むかしむかし、犬は大切にされた。これは平安時代よりむかしという意味である。およそ9,500年前と推定される、日本で最古の犬の骨が神奈川県横須賀市の夏島貝塚から出土している。縄文時代の縄文犬の特徴は、きちんと墓がつくられて埋葬されていることで、後期には人間の墓の区域に犬の墓もつくられる。出土した骨を見ると、老年まで生きていた個体が目立ち、狩猟のパートナーとして大切に扱われていたことがわかる。弥生時代になると、犬は食用にもなった。食べられた後、骨がバラバラに解体された状態で出土するのだ。銅鐸に人間が犬とともに狩猟する絵があり、縄文時代同様に共に狩猟していたであろうに、働いてくれた犬を葬った墓は見つかっていない。人びとの犬に対する意識の変化は渡来文化の影響だろうか。

一条天皇は犬に冷淡だったが、応神天皇は犬を愛おしんだようで、狩猟犬に“麻奈志漏”（＝愛しいシロ）と名づけたことが『播磨国風土記』に出てくる。この「猫と犬と馬」事件が起こった長保2年の末に定子はこの世を去る。表題の最後の狐には触れられなかった。稲荷神の神使である狐は朝廷に出入りすることができ命婦の格を授けられるのだが、それらは別の機会に。